
月 刊

MéLange

VOL.94



2014.08.16

第17回口ルカ詩祭朗読詩特集

月刊

「MéLange」VOL.94

2014/08/16

月刊

「MéLange」編集部

詩 & 川柳

サルバドル・ダリに捧げるオード……………ガルシア・ロルカ 鼓直訳 03
 先祖蚊……………中嶋康雄 04
 参の夢 (榎の木のミミック)……………高谷和幸 05
 なんだかんだぶろばがんだ／桃の涙……………まあの 05
 不眠—アンダルシアのルイセニョールに捧ぐ／種……………平岡けいこ 06
 川柳連作 『喋喋喃喃…神神は囁く』……………情野千里 07
 彼の地……………岩脇リーベル豊美 07
 煩悶……………大橋愛由等 08~09
 た・そ・かれ--声のためのver.20140816……………安西佐有理 10~11
 越しすぎに書く詩集のための詩／ヒロシマ／きざし／郵便的／群がる六月の花嫁
 ………………中堂けいこ 12~13
 虚亡隠士行乞巡礼……………千田草介 14
 ニライカナイ／酸素……………福田知子 16
 (逆説的禁断)ロルカ残照……………岡本清周 17
 雑草離離……………大西隆志 18
 夏の庭で／地下水脈……………北原千代 19
 金魚／キメラになって……………今野和代 20~21
 音の羽……………萩原健次郎 22~23

エッセイ

<神戸詞あしび>83 「メキシコに渡ったバイラオーラたち」……………大橋愛由等 24

編集部日より★15／「月刊めらんじゅ」94号は、「第17回ロルカ詩祭」の朗読作品を特集しました。同詩祭は、二部構成。一部は、ロルカ作品の朗読。今回もスペイン語文学者の鼓直氏があらたな訳をひっさげて参加していただきました。今回翻訳したのは、ロルカとダリとの往復書簡の中にあつた詩作品だそうです。二部はロルカの世界にゆだねた自作詩の朗読。京都から萩原健次郎氏をゲストに迎え、ドイツからこの詩祭にあわせて帰国した岩脇リーベル豊美さん、長崎・五島列島から参加した岡本清周さん、滋賀からは北原千代さん、久しぶりの平岡けいこさん、ウクレレを弾きながら参加したまあのさん、といった顔ぶれに加えて、「月刊めらんじゅ」詩友たちと多士済済な朗読者が参加したのです。／今号に掲載した作品は、かつて「月刊めらんじゅ」に掲載した作品は対象外とし、同誌に初出ないしは書きおろし作品を優先して編集しました。〈表紙写真は、鼓直氏。高谷和幸撮影〉 (大橋記)

◆サルバドル・ダリに捧げるオード

ガルシア・ロルカ

おお オリーブ色の声のサルバドル・ダリよ！
 きみ自身ときみの絵が語るものを ぼくは語る。
 きみの若い未熟な筆使いを ぼくは褒めないが、
 きみの矢の確かな方向は歌う。

カタルニャの光のきみの美しい努力を、
 説明可能なものへきみの愛を歌う。
 傷ひとつないフランス製のトランプの
 きみの優しい天文的な心臓を歌う。

きみが休みなく追い求める彫像の渴望、
 街頭できみを待ち受ける感動への不安を歌う。
 珊瑚と貝殻の自転車にまたがって
 きみに歌いかける幼い海のセイレネスを歌う。

しかし何よりもまず 闇の時にも黄金の時にも
 ぼくらを結ぶひとつの想いを歌う。

ぼくらを眩惑するのは〈芸術〉ではない。
 何よりも愛、友情、あるいはフェンシングだ。

きみが辛抱よく描く絵よりも、
 不眠の肌の女テレーサの胸よりも、
 不実なマテイルデの濃い巻き毛よりも、
 双六として描かれたぼくらの友情なのだ。

黄金のうへの血のタイプの痕よ、
 永遠のカタルニャの心臓に線をきざめ。
 鷹を失った拳のような星々よ きみを照らせ。
 きみの絵ときみの生命が花咲いているうちは。

膜質の翼を持った水時計を、
 寓意の硬質の大鎌を見つめてはならない。
 船と水夫らであふれる海に向かい、
 風のなかで つねにきみの絵筆を被え 裸にせよ。

◆先祖蚊

中嶋康雄

お墓参りをするときは、先祖蚊に腕や脚をそつと差し出してあげよう。

先祖蚊は墓石にとまってじつと待っている、雨の日も日照りの日も風の強い日もじつと待っている。

子孫の誰かが、参ったならば、
「よく参った よく参った

と言うかわりに、そつと血を吸う。決して飢えさせてはいけない。せめて一年に一度くらいは参らなければ・・・

先祖蚊は昆虫の一種ではなく、霊の一種である。先祖蚊をつかまえて、その顔を虫眼鏡で観てみよう。

おじいちゃん、おばあちゃん、ひいじいちゃん、ひいばあちゃん、話でしか聞いたことのない、遠いじいちゃんばあちゃん、だけどどこかあなた自身、あなたの父さん母さん、兄弟姉妹、子どもと似ている、ああ、この顔はまぎれもなくご先祖さまの顔と納得するだろう。

先祖蚊は、そのストロー状の口を墓参りに来た子孫のいとおしい腕や脚に刺して血を吸うことを唯一の楽しみにして、墓石を滅ぼそうとする虫や鳥、コケ類や細菌類と日々戦い続けている

◆参の夢（樫の木のミミック）

高谷和幸

強い日差しは空爆（蚤）のように庭の脳天地図を喰っている。炎上する庭では百年前のぼくは「赤面する放火魔」だったのではないかと、「大きな森」の方へはぐれていった足跡（蒔かれた言葉）を追って歩いていくと、背中に背負ったのつべらぼうの青坊主（樫の木Aをオスカルと言った人がいた）が・・・潭、：たん、：潭、「タノタタノタン。三歳になったらブリキの太鼓を買ってあげるからね、つて約束したじゃないか？」・・・なんともアド・ホックな庭の言いぐさだろう・・・たん、（押さえてつぶした骨相に見覚えがあるような）：たんたん、「潭」、グ、ググ、「御父さん、ここに大きな木があったはずだがな」と声をかけてきた。それで三歳で成長を止めた自分の碎が確かにいたようにだんだんと思えてきた。（樫の木Bをオスカルと言った人がいた）。ぼくたちは庭のビオトープの時間に（蒔かれた種のねじれた円環、その界面に）、落ちて行つた。どれぐらい歩いただろう。奥に続く道すじで左右に分かれた二股に差し掛かって、「道（いつかは身体が通り抜けていった）が二つなのはずつと後で分かる話で、その前に羊水に浮かんだ右と左の足や手を見て、同じぼく（ぼくのミミック）があると気づいた」。と、おかしな考えが浮かんできた。そして、二つの樫の木がオスカルと呼ばれるのはどちらかが殺害したことを秘密にしているからにちがいないと思えてきた。股の根本のあたりで座っていたら「左がいいだろう」とのつべらぼうが言う。ぞつとして「心が読めるのか？」と聞くと、「百年も前から道理（編み針）は変わらない、と太鼓を一つ打った。警官に追われて祖母の四枚重ねのスカート（ごわごわしたビオトープの空間）の中に隠れた放火魔が御父さんだ、と言う。そうすると、ジャガイモ畑に石炭袋がごろごろ転がっていて、むこうの丘陵と河の境目に材木小屋があかあかと燃えているのが見えた。天高くまで炎は上がつてばちばちと音をたてていて、これじゃ手が付けられないな、と考えると顔の半分が熱く赤面してくる。背の高いやせつぼちの影と太つちよの影がびよんびよん跳ねながら追いかけてくる。「まづい、犯人だとすぐに分かっってしまうじゃないか」（この声は誰だ？）。オスカルが太鼓を連打して、ぼくが逃がしてやるよ、と言つた。そうして大きく開いた穴へ、ボンと背中を押した。頭から落ちながら、百年前にぼくは殺されたのだと悟つた。「でもそれは誰が言つたことだろうか」。樫の木とオスカルが別のものだと思うように、と遠くから聞こえてきて、急に背中の中のつべらぼうが石のように重くなった。

るのだ。加えて、一昔前は都市開発、最近は少子化とも戦わなければならない。

なのに、全ての血縁者が墓参りを長年怠けていると、夢枕に立つ。

「参つとくれ。参つとくれ。参つとくれ。

それでも参らなければひどいことになる。先祖蚊はある日しびれを切らして血縁者探しの旅に出る。そして必ず見つけたす。そろいもそろつて、つめたい子孫の顔をじつとみて、最後のチャンスを与える。

「参つとくれ。参つとくれ。参つとくれ。

それでも、お墓参りを思い立たなければ、首を刺す。血を吸う。血を吸う。血を吸う。

「なんで参らぬ。なんで参らぬ。なんで参らぬ。やがて、血を吸われる子孫の顔から血の気がひいてゆく。蚊は吸つた血でぶつくらぶつくら膨張を続け、人の頭ぐらいの大きさになる。蚊の顔が肉眼でわかる。その口が血を吸いながらも開く。口の両端から血がぼたぼた落ちる。

「なんで参らぬ。なんで参らぬ。なんで参らぬ。血を吸われる子孫の顔が枯れ萎れてゆく。先祖蚊はどんだんどんだんどんだんふくれ続ける。子孫はどんだんどんだんどんしぼみ続ける。」「なんで参らぬ。なんで参らぬ。なんで参らぬ。子孫は先祖蚊に吸い尽くされる。

先祖蚊は人ほどの大きさになり、バタバタと羽ばたき、ものすごいスピードで墓へ帰る。

まあの

◆桃の涙

もも mm 桃の涙 今にもこぼれそう
夏の日の空を隠す 入道雲の下で
丸くて柔らかな肌をピンクに染めて
今年の出来栄え自信あったのに

もも mm 桃の涙 ひと粒こぼれた
生まれて育つたところ なつかしむように
ふくしま果樹園で 愛情たっぷり含み
甘くてジューシー 自信あったのに
みんな目をつぶる 蟬だけ鳴いてる

もも mm 桃の涙 いつまで続く
降りだした雨に打たれ やがて土に還る
何も感じない 冷えた果実のどこかに
消せない烙印だけが残ってる
いつかもういちど会えたらいいね
いつかもういちど会えたらいいね

まあの

◆なんだかんだぷろぽがんだ

街をあるけばお兄さん すかさず差し出すポップなチラシ
お得なメニューがありますよ みんなにお知らせしたいのね
なんだかんだ ぷろぽがんだ
気持ち伝える ぷろぽがんだ

駅前立ってるお母さん マイク片手にうれしい顔
原発やめてくださいな みんなに助けを求めている
なんだかんだ ぷろぽがんだ
気持ち伝える ぷろぽがんだ

うちに帰ってひと休み 今日のでき事振り返る
パソコンたちふあげてつぶやくよ あなたに教えてあげるのよ
なんだかんだ ぷろぽがんだ
気持ち伝える ぷろぽがんだ

今日はこうして唄ってる ドキドキしながら唄ってる
戦争なんかしないでよ みんなで声を上げたいね
なんだかんだ ぷろぽがんだ
気持ち伝える ぷろぽがんだ
なんだかんだ ぷろぽがんだ
気持ち伝える ぷろぽがんだ

◆不眠

―アンダルシアのルイ
セニョールに捧ぐ

平岡けいこ

浅い眠りを繋いで生きている
今日を失いそうな朝
緑の好きな鶯は高々と謳い
空の彼方へ飛び去った

浅い呼吸を重ねて生きている
誰かが許容できる
小さな嘘や欺瞞を重ねて
遠い国の殺戮を赦している

現実を見まいと
目を開いたまま眠り続けるのか
声を上げないのは
時を待っているから

この憤りをぶちまけたら
NOと拳を上げた
呼吸は整い

熟睡できるだろうか

風に乗った鳥は
血に染まった大地と
平行に翼を広げ
悠々と今日を超えてゆく

みんなが行って
秋が来た。

◆種

平岡けいこ

そして哀しみは怒りを連れて
空高く舞い上がり千年の雨を降らせた
君よ
僕の嘆きを聞け
山肌にすがる木々が
暴風に煽られ慟哭するさまを
その目に灼きつけよ

裏切りは何よりも黒く
伐採される恋心は風向きにまかせて
次々と倒れてゆく

森は為すすべもなく
鳴咽をこらえ震えている

命を積み重ねて
双葉は両手を広げ
次々に腕をからませ
あたらしい葉を空へ掲げたのに

今日の空の残酷なこと！
やまない雨はないというのに
見上げることもできない激しい雨粒が大地
に突き刺さる

ぼくはここから立ち上がる
千年の雨を背中に受け
足元は緩く
崩れ
両腕は砂に埋もれても
ぼくはここから這い上がる
この哀しみを抱いて
緑の芽を息吹く

◆川柳連作

『喋喋喃喃…：神神は囁く』

情野千里

つつがなく苧麻と乱麻の闇となる
あなるあなどる百合根を掘った穴
合点承知のハシリドコロを茹でている
梔子を孕む男のふくらはぎ
ズッキーニ登場トマトを両脇に
葦牙あしかびのよじれこすれて曲うんぬとなる
成り合わざる処が私にみつよつつ
私の産んだ蛭子の陽気なステップ
世界一周しようと葦船が誘う
二の膳はえをとこえをとめの順
こをろこをろと有無有無と産む嶋も神も
自分を誉めているみほと炙かれて
ペットボトルに黄泉つ国なる美味し水
視たわねとうじいかづちを祓いつつ
黄泉つひら坂へ急ぐ桃売りのワゴン
筍は引き抜きにくい醜女の深情け
自分を探す速須佐之男の鼻ピアス

◆彼の地

岩脇リーベル豊美

壊れた地平が
一すじの破線を紡ぐ夜明け
戦いの場所に朝霧が立ち籠める
白燐弾の残骸が処々に燻る
炸裂は白燐の染みついた楔を撒き散らした
大気中の酸素と結びつき
蒼白い炎を放つ元素記号で
ヒトの皮膚を火が舐めると
肉を通して骨まで浸透し
呼吸を繰り返かえす限り燃えつづける
葉莢が転がる
地は震えている
武器よ 黙らないか
追い追われるヒトたちの願いが
互いに受け容れられることはなかった
そう生まれ堕ちただけということなのか
化学式を犠牲者意識と詩情で混乱させる
そして
傷痕を身につけ記号に満ちても
ヒトは地に臥そうとするのだ
武装の紐を解くことなく

◆煩悶

大橋愛由等

ひまわり畑に
向いたその部屋
置かれたままの
三脚の椅子
テーブルの上に
読みかけの恋歌^{マドリガル}
異なる三つの葉
八月一八日付の新聞の切れ端
蝉の羽根
鴉羽

戻ってくる 戻ってこない
煩悶を繰り返し
ずっと座らないままにくたびれている
もうお別れだと言いついた深い溜息が残響している
去年はそういえばここに座っていたはず
だと慰められる
その三脚

午前一時ちょうどに
椅子たちを
とおろすぎる風が^{マドリガル}
恋歌の頁をめくり
しるしを示し
帰るのか 帰らないか
わたしたち
あきらめようと
忘れようと
していること
そんなこと
開かれた頁にしろされていって
お見通しなのだから
風のしらせを
見て見ぬふり
「ねえ、」
としかいえない
わたしたち
もつとこまじ
こじやれた
疵^{きずな}に満たされた
そんな詩句
椅子を周回するばかりの
日々の中では
Finoをいさぎよく

お好みの
パタタと鶏肉たつぷりの
オージヤを
よく冷えた

セルベツサと
リアスヴァイシヤスの白を
常備して

椅子たちは 今日も そこにあり
わたしたち
その椅子たちを周回して
日々が重ねられ

その場所は その場所なのだから
「ねえ、」とだれかが云えば
返事なんてないのは分かっているくせに
「ねえ、」と今日も言ったよね、だれか
あしたも云うだろう

あした云うのは わたし かもしれない
でもその椅子たちに
わたしたち
ときどき

座ることだって
その場所から
雲の機嫌を読みとつたり
崎人に手紙をしたため

恋歌^{マドリガル}を復唱したり
だれがどの頁になにを

呑むぐらいが
朝早く起きて
メス猫^{シオン}
挨拶をするぐらいしか
思い切つて
恋歌^{マドリガル}の葉をそつと
棄ててみよう
わたしたち
そうすれば
わたしたちが
わたしたちでなくなり
この三脚を
焼いてしまうことだって
恋歌^{マドリガル}のことなんて
忘れてしまうことだって
そして
わたしたち
昨日も 今日も
同じ場所にある椅子たち
がコトリと
音をたてること
メス猫^{シオン}
毛づくろいをする椅子にかぎって
ああこれ以上

書き込んでいるかも
知っていて

わたしたち

不在に馴れてしまうのがこわく
帰ってくるわけじゃないよね つかれたわ
椅子はもう記憶にしてしまおうよ
ひそかに思うけど

昨日も 今日も
椅子たちはずっと 同じ場所

メス猫^{シオン} 律儀にも
一日ずつ違う椅子に座り
毛づくろいしていること
わたしたち

気づいていて
フランス窓を開け放つと
ひばりたちの

(どんな石を拾ったのか
悲しみなんてどこで棄てたのか
つまりいたのはたそがれだったはず
昨日だれとどこで座っていたのか
知っているけど 知らない

分かっているけど 云わない
なんども何日も くりかえし
さえずっていること
気づかないとでも

周回の日々を
重ねることは
かなしみがかなしみを
捕食しあい
せつなさが
自裁をえらび
「ねえ、」さえも
枯渇していく
でもね
わたしたち
夏になると
八月一九日に戻ってこなかった
その人のその椅子のこと
その人が残したうたを
くちずさんでいると
かすかに ほんのかすかに
気配がうごき
小さな声で呼んでみる
「ねえ、」
「ねえ、ロルカさん」
きつとだよ、ロルカさん
椅子は あしたも
同じ場所だから

◆た・そ・かれ

―声のための ver.20140816

安西佐有理

1

たそかれ　こんな時間に、そこにいるのは誰か
朝のうちから、一滴一滴と注がれるはずの時間は注がれきったからきょうという日につながれた管の先からはやがて血が、わずかに逆流しはじめていたたそかれ　まがときを待つ　こんな時間に、そこにいるのは誰か
つい先ほどまで、夕暮れを予感する空の所在ない白さがひろがり
麻のパラソルが巻いて仕舞われ
チョウセンアサガオの蕾が胡粉の空砲を撃って開こうとしていたのに
日が落ちていくのは、とにかく速い
白はやむなく夜が引き受け
血の色がビルと山を蔭の色に切り出したけれど
きょうの、けだるい身体という身体たちはまだ生きているので
(どうだろう)

ジャックのかわりによくよると高く低く、羽ばたいて、遠ざかっていき
ます
むなししい部始終を見おろしてきた昼の月の
ほほえみ、怒り、かなしみをないませに
した、むなししく優雅な顔は
もう、その空にはありません
死んでも踊りつづけた法王や王様も、いなくなりました
なにしろ、かれらの突撃銃を見つけるなり
ジャックの、わたしたちの、野蛮な血管が、あつというまに
巻きついてしまったからです※
暮れていく、たそかれの空に、鳥は飛んでいます
しずかに　しずかに
3
また夜になり
また朝になるのを
私は見ていた
ガルウガルウガルウガルウ
私の血管は凶暴で貪欲だから
一日じゅう
プラスチックのチューブに嘔みついて
放さない

2

棘だらけの幻覚ときたら、そちらにうつかり目をやったとたん
ペット志願の野良猫のように
幼さを演じていることを自分でさえ忘れ
足元にくるんくるんとまとわりつき
にやあんにやあん
きょうの身体から、無邪気に肉をむしり
取っていく
(どうだろう)
とんでもなく、くるぶしかじりすねかじりな幻覚よ
とがった毛並みをなでることもできた手が
無明の方向をなごり惜しげにさぐって
つまびく真空のゆらぎ
(どうだろう)
たそかれ
息つかせず(日がすつかり暮れ)暗さを増していく空に
管を抜き血を放つ、指先のわずかな摩擦の熱
こんな時間に、そこにいるのは誰か

ときどき、ジャックと呼ばれていました
ジャックというのは、言うことをきかない軍用犬の名前です
だから、ジャックは学校へ行きます
みんなと同じに、ランドセルを背負って
足の指先
手の指先
頭の先からしつぽの先まで
低いうなりの波長がめぐっていく
ガルウガルウガルウガルウ
私は見ていた
あの森、あの公園のある丘陵のふもとに
広がる墓地を
私は見ていた
まぶしい緑の濃淡と遠近をくぐり、無名戦士の碑を横目に
階段と遊歩道をくぐり、空襲犠牲者の碑を横目に
それもまた私、それもまた私と
たわいない箴言と荘重なレシピのアーカイブに到着すれば
ガルウガルウガルウガルウ
もう、そのすぐ横に
絶えた血脈がいくつも葬られている
それもまた、私だったのを
私は見ていた
ガラス板に焼きつけられた誰かの記憶が
あまりになつかしい、いくつもの声で話
しすぎるのを
もとより私の影ではなく
私の血でもなかつただろうに

もう死んでいるみんなの、なまあたたかい湿度がざわめく教室で
ジャックは毎日、おとなしく座っていました
ある日、ジャックの鼻に、ひんやりとおつてくる生き物がいました
そう、それが、文字というものだったのです
そこで、ジャックは腑分けすることにしました

文字を腑分けするジャック
文字の物語を腑分けするジャック
物語する猫を腑分けするジャック
猫であるあなたを腑分けするジャック
あなたの新聞記事の臭いを腑分けするジャック
臭う兵士の半端にのびた髭を腑分けするジャック
敗戦の雨のあとのクスノキの落ち葉と土の甘いにおいを腑分けする、
鮎の、蛙の解剖図を腑分けする
ジャックみずからの脳の奥底を腑分けするジャック
するとどうでしょう
そこには、一羽の鳥が首をかしげて、ジャックを見ました
ジャックは、まばたきしている鳥をそのまま、空に放ちました
ジャックの頭からとびだした鳥は

カモメの幻がときおり黒々とよこぎる、この俯瞰図の中で
私になつてしまった血が
ざらざらとした蟬の声の粒を浴び
ここにおいて、私の血管に、うなりをめぐらせるのを
ガルウガルウガルウガルウ
ガルウガルウガルウガルウ
低いうなりのリズムのなかで、待ちかまえている私の眼の向こう
えいている私の眼の向こう
あの森のずつと先を走っていくのは
ずいぶんと小さなバスだこと
それでもここからは、はつきり見える
車窓の向こうで百年後の夢を思い出して
あくびしている
亡霊の目もとの涙まで
また朝になり(それもまた、私)
また夜になる(それもまた、私の)
血の、循環する、時間のあいだで

※ロルカ「ニューヨークの詩人」「死の舞踏」(「踊ってはいけないうた」)
法王は! / それから王様もだ」
「ジャングルの蔓草がライフルのうしろに忍び寄るだろう」
「仮面 この仮面を見るがいい! / それは密林の毒を吐きかける / ニューヨークの乏しい苦惱のうたに!」
(「一部を除き、鼓直訳」)

◆越しすぎに書く詩集の ための詩

中堂けいこ

Wの詩集をひらいていると
影のようなのがわたしをとおりにすぎる
くろっぽく形のないしかしすでに自明であ
るのに
とおりにすぎたあとが大切なのだ
鳴く鳥が
夏の陽に焼けついた瓦を足ぶみする
その跳びあるくさまが足音と
ともに軒先からたしかな手ごたえとしてこ
ぼれ出る
点点と
ひらいた詩集にも消しようのない
痕がうきあがる
鳥の鳴き声をなんと表せばいいのか
詩集のどこかに記されているはずだった
わたしにはないもつと大きな影を
Wは手品の手をひらき品品としてさしだす
のだった

不確かな存在証明を編む大気のこと
鳥語のこと りりり りり

◆ヒロシマ

中堂けいこ

トトメさんの教会に行くのは
日曜日の朝で父に手をひかれて
真つ黒いつめえりの裾まであるのを着た
おおきな両腕で幼いわたしをだきかかえ
祭壇のはしでそのまま体ごと沈みこむ
人々のあかるい声がして
教会堂の裏に出るとセメントの段が灰色に
にじみだし
それはよろこびやかなしみの虫で覆われる
のだと逸らさずに眺め
トトメさんと低めた声で話すのを
ずつと後になつて
路面電車がゆるやかにきしむ
教会の場所を確かめるのだった

◆きざし

中堂けいこ

なにも書かなくともすでに書かれた文字を
指でおさえ
すぐちかくの坂の方からパワーシヨベルの
それらしい響きは土の層をあつめたりひろ
げたりするが
つぎつぎに更地から
なにも身に付けない人がやってきて
かれらは足音をたてず宙を浮くように折り
たたまれ
しだいに広い土地がそのまま湖になるその
光景を
もう知っているのではないか
指先から洩れ出るわずかな水滴は光のなかで
うつつらと浮きあがり
ゆきさきの広い土地をゆらす

◆郵便的

中堂けいこ

いくらか手紙を書いてすでに書き終えてお
きながら
また書かなくてはいけないあて先の人をお
もい
白い紙をぎつしりと折り封をして
ポストに入れる
手紙が底につくぽとりと音がして
なにを書いてなにが書かれないのか
あて先の人はまだもうすでに書かれないのを
いそいで帰ろうとして後ろからおびただし
い数の紙飛行機が
白いはらを光らせ追いこしていく
あの音を聞いたからにはすでに書かれた手
紙は
あて先の人はまだもう書いてしまっていた
側溝に落ちた白い紙を拾いあげると
きれいな折り目正しい三角があらわれた

◆群がる六月の花嫁

中堂けいこ

群がる六月の花嫁は姦しい 二の腕をふるわせながら三角地
をつみあげる つみあがった三角土地はみごとな沖積層をな
してデルタの町ができあがり 底辺には鉄の道が走り透明な
羽根がふるえるたびに待ちくたびれた婿たちが駅舎に置いて
いかれる
群がる六月の花嫁はそう呼ばれるはるかむかしからデルタの
土地のあるべき姿を人々に示しており 商店街のアーケード
では今日の福引がひっそりと引かれるのだ 当たり引きの婿
のひとりとは市政に打って出る機会をえるのだが いっぽうで
商店街の入り口に建つデルタ映画館のスクリーン写真のなかで
斜にかまえる緑色のゴジラに魅入られ すでに六十年の暦の
めぐりを祝わずにはおれないのだった
群がる六月の花嫁のひとりはこの緑色のゴジラと所帯を持つ
べく彼の殺人溶解ビームを遮断せねばならない 写真のなか
で斜にかまえる彼はたしかにカラー彩色だったが東宝映画そ
のものはそっくりモノクロームで殺人ビームの輝きも群がる
花嫁も扇状地の繁栄も地平のあなたではみんな仲良くばんや
りとした喩にとけてしまおうと言われ
言われつばなしでおびただしいマリッジフラワーを地平線の
あなたに投げる花嫁たちを咎めることはだれにもできない

◆ 虚亡隠士行乞巡礼

千田草介

ヤタガラスに眼球をついばまれたので
 眼窩がぼっかり空いてしまったのだが
 代わりに奴が古墳の発掘現場で盗んだという
 ガラス玉をくれたのでそれをほめると
 なにも見えはしないにしても
 なんだか千五百年昔があたり一面にあつて
 翡翠色の野山があたたかくひろがるなかに
 手児奈という娘が菜摘みをする気配を感じて
 すっかりうれしくなつてしまひ
 このやろう貴様の真ん中の足をよこせと
 いったんは逆巻いた怒りも嬌声に失せ
 おにさんこちらという声が
 鬼さんではなくお兄さんにきこえて
 いつぞや旅をしていたころの
 あいまい宿の二階招きを思い出して
 ますます胸おどろ
 よおしきつとおまえをばつかまえて
 ねんごろになつてやるぞと勢い込み
 足を踏みだそうとしたところが
 無惨によろけたおれ
 土をつかんで立ちあがろうとして
 はたと老いの靴音に気づく
 これはいつたいなにゆえの業罰なのか
 昔は空が幾層にも重なつて見えた
 紫外線と赤外線とのあいだの
 グラデーションが彩る高度を
 眼で駆けあがつていくことができた
 虚空には不在なるものの神殿があつて
 蓮の葉形の羽根を八重にひろげており

その羽ばたきが風鐸を揺らせ
 りんりんとして音に忘我となつた
 昔は耳も空飛ぶことができた
 象といつしよに宇宙遊泳もできたのだ
 朱印帳をひらけばさういふ
 いまは失くしたものが列をなしている
 それにしても失うとはどういふことか
 その前提の持つとはどういふことか
 一秒つかつて一歩あるくこと
 なにか得たのか
 ソーラーパネルと風車の付いたマニ車
 勝手にくるくるまわるものだから
 山川草木悉皆成仏なのですよ
 からくり小屋から声がするので
 暗幕をめくつてのぞいてみると
 踏絵に使われたにちがいないメダルの中の
 マリア観音がにっこり笑つて
 おいでおいでをする
 お気をつけなさい
 あれはおそろしい
 ヴァギナ・デンタータだから
 あんたの逸物を嘔みちぎるからと
 頭上から奴が口笛で警報する
 地母神は獲つて喰わんとするから
 飛んで逃げるに如くはない
 そういえば空の参道には巫女か遍路のものか
 赤い鼻緒の鉄下駄が脱ぎ散らかされてあつた
 履物の主は消えてどこにもいない
 ただサンマの群れが蚊柱のようにあるので
 手をのぼすとかんとんにひとつ捕まえられ
 やれうれしや
 しかしさうどうやって喰おうかと思案するに
 頭にうかぶのは七輪ばかりなのだが

荒物屋は近くになさそうだから
 寺で護摩壇の火を借りて炙ろうか
 という考えがうかんだとたん
 殺生はいけません
 そのサンマを放してやりなさいと
 住持らしき尼僧が血相変えて諭すので
 おとなしく従おうとすると
 イルカが横つ飛びにきてくわえて去つた
 長いこと雲しか喰つてなかつたんです
 なにか乞うてもなにも手に入らぬので
 よいではないですかそれで
 あなただんだん透き通つて
 ついには空になれます
 色身をもつ者には無理です
 いまも見たとおり
 みんな喰らいあつていゝではないですか
 それが生き物のもつ摂理なんですよ
 空腹ではそんな気になりませんが
 乗り物の中で女人の尻にさわりたいくなるのも
 あなたの裸身を思つて劣情をもよおすのも
 行乞の身でも生きていゝからには
 逃れられはしないのでは
 では死んでおしまいなさい
 ええそのうちに
 そう言い合つたのは
 まだ若いいつの日のことだったか
 眼を失つて身に残つた
 耳鼻舌身で黄昏を感じたとき
 カラスの声がして
 ふと空からの山越しの落日が
 はつきりとのぞめた
 明日は佳い日なのできつと

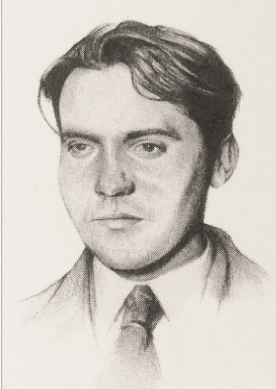
夏の夜の夢

にしもとめぐみ

ソロンゴ
 月は小さな井戸
 花なんかいらぬ
 今夜私を抱きしめる
 あなたの腕があればいい
 La luna es un pozo chico,
 las flores no valen nada
 lo que valen son tus brazos
 cuando de noche me abra z an.
 (訳者不明、歌詞はロルカによるの)

ソロンゴは、もともとアンダルシア地方に
 伝わる古い民謡で、ガルシア・ロルカが発
 掘した曲である。この曲はヒターノたちによ
 ってフラメンコを演じるタブラオ(=ライブハ
 ウス)で歌い継がれていく。歌詞はロルカが
 あらためて編集して組み立てている。こうし
 たロルカ作の詩のいくつかがフラメンコの曲
 に取り入れられているのだ。引用の歌詞も見
 ても情熱的であることは分かるが、フラメン
 コの曲の中でも、パイレたちが情熱的に踊る
 腕の見せどころの曲である。

ロルカは音楽の素養もありヴェルディの弟
 子にピアノと作曲を習い、かのマヌエル・
 デ・ファリヤに薫陶を受けたと言う。おまけ
 にサルバドル・ダリとも親交があり、偉大
 なデッサン画家でもあった。ロルカの活躍と
 二分される。有名な三代悲劇も一作に三年か
 ら五年が費やされると言う運筆ぶりであつ
 た。しかも現実起こったことをもとに、登
 場人物はほとんどが実在の人物であつた。そ
 れをロルカは独自の詩畫で発酵させたのだ。
 ガルシア・ロルカ1936年8月19日早朝グ
 ラナダ近郊ビスナルのオリブ畑で銃殺され
 る。38歳の若さだった。
 今宵もロルカを愛し集う者たちの暑い詩祭
 が始まる。オレー!



〔詩祭スケジュール〕
 8月16日(土)午後5時 開場
 〔1部〕PM5:30~PM6:00
 ロルカ詩の朗読
 〔2部〕PM6:00~PM8:30
 詩人たちの自作詩朗読
 演奏/湯口哲成(フラメンコギタリスト)

第17回 8月16日(土)

《場所》スペイン料理カルメン(神戸市中央区北長狭通1-7-1
 電話078-331-2228〒650-0012)
 JR・阪急・阪神・地下鉄「三宮駅」から徒歩三分。
 《料金》A:3600円(チャージ込み) (1) 夏の特選スープ (2) 季節のサラダ
 (3) メインディッシュ (4) パエリア (5) コーヒー (6) デザート
 B:2000円(チャージ込み) (1) ワンドリンク
 (2) タバス盛り合わせオードブル
 《特典》当日参加者の方全員に、第二部参加の詩人たちが朗読する詩作品掲
 載の『八月-九日詩集・vol.17』を差し上げます。
 《内容》スペインを代表する詩人の一人であるフェデリコ・ガルシア・ロル
 カの生誕100年にあたる1998年から始まった「ロルカ詩祭」。今年も
 ロルカが殺された8月19日に近い土曜日(16日)に開催します。

ロルカ詩祭

- 出演朗読者
 ゲスト・萩原健次郎
- ★
 第1部
 1.アグスティン 2.北原千代 3.今野和代
 4.鼓直 5.カンテフラメンコ(鳥居貴子)
- ★
 第2部
 1.中嶋康雄 2.中村雅子 3.北原千代
 4.平岡けいこ 5.大橋愛由等
 6.情野千里 7.にしもとめぐみ
 8.高谷和幸 9.中堂けいこ
 10.千田草介 11.安西佐有理
 12.Dobiński 13.岩脇リーベル豊美
 14.岡本周周 15.福田知子
 16.大西隆志 17.今野和代
 18.萩原健次郎

会場

スペイン料理 カルメン

☎&FAX 078-331-2228

《料金》A/3600円
 B/2000円



◆キメラになつて

今野和代

羽音？波？

ルカの描く春
のリアの輪郭みたいな臉を開いて
呼ぶと 呼びかけると 懐かしい声を胸深
く溶かしながら きみ
の頭上いっぱい広がる遠い青と うちの破
れかぶれの爛れた空へ
伸びあがるように 爪先だって ざん ざ
ん ばらん
キメラになつて ぶつかつて 巻きあげて
巻き上げられて からまつても
バランスをくずして からまつても
ノイズの渦の今日のくぼみに
鬱血を 繰りかえしながら 探す
めつた打ちされたボクサーみたいな ステ
ップ
を 地上に ヒョロ ヒョタ 刻みつけな
がら すると
もう いいよ もう いいから もう も
う いいよ 声は は
る の 泡ぶくになつて いい よ ト
ン ツー ツー
ツー ツツ トトト ツー ツー ツー 暗い

気流を逆巻きながら 壊れたモールス信号
に乗つて 残響の波を

ひきつれて（春が来たつて）
かがみこんだまま （春が来たつて）胸の
りボンだけが しきりに 揺れて
もう 踝も 膝小僧も 眼も（何になろ
う）
肩も 腕も 輪郭が 臙に霞んで 影
を揺らしながら （なんになる） 滲んで
声が は
る の 泡ぶくになつて ツ ツ ツ
ここに トン トート いる トト
こつち に ツー ツー ツー わたしは
ちぎれ雲の心になつて きみの声を
こつちに ひつつかもうとするのだけど
空が 割れて 傾いて 光の破裂のただ中
に
吸われていつた 息のむ夜明けの
煉獄の火色に溶けて

◆ニライカナイ

◆ニラカナイ

福田知子

島のひときわ切り立つたところ
海岸は小刻みに弧を描く幾つもの入り江にな
つていて
地元の漁師が拵えたのか その入り江のひと
つに浮棧橋が見える
尖った小さな石ころだらけの急な道を
青々と茂った木々から垂れ下がる蔓を伝いな
がら
海岸まで降りていつた
そこには猫の額ほどの珊瑚礁の砂浜が
入り組んだ海岸線に沿つて静かに波に洗われ
ていた
樹木に覆われて上の道からはみえなかつた幾
つかの砂浜が秘密のようにあつた

◆(逆説的禁断)ロルカ残照

岡本清周

見知らぬ男と
見知つた男とが
時代を抱え込んで
恋愛しあつている。
琥珀色した霧が
漂う森での
スペイン内乱の、
青く淋しい物語。
ふたりは深く悩む。
受動と
能動との駆け引き。
能動と受動の悦楽。
戦火を
かいくぐる逃避行。
青く恋をし、
むらさき色に
愛し合うことが抗議。
白日のもと、

紫色の恋愛へと
傾注していくことが
抵抗の証。

能動のロルカ。
受動する新聞記者。
夜に能動が
受動へと新入し、
受動が能動のたましいを
真昼間に虜にする。
ひとつの肉体の中で、
ロルカと新聞記者が
傷口を
舐めあつている。
執拗に燃え狂う戦火。
囚われるひとつの
正義の肉体。

ロルカの空は
赤い、
色をしているのか？
ロルカの海は
真つ赤な、
色をしているのか？
ロルカの野辺は
燃える血の色をしているのか？

反骨のロルカ精神で
血を洗えるか？

流れる。
流れる。
流れていく。
反骨の
ロルカが流れていく。
反骨の、
ロルカが消されていく。
反骨のロルカが
流され消されていく。

ロルカは何処だ！
ロルカは何処だ！
ロルカは何処だ！

反骨の、
ロルカが流されていく。
反骨の、ロルカが
消されていく。
新聞記者のペン先が
スペインの闇夜で
ざら紙の上を
走る。

◆雑草離離

大西隆志

ひとつ、ひとつに名前があるはずなのに
ひとつくくりで雑草とよんでいる
たべられる雑草もあるが
ぼくらは上品ぶって、道端の草には興味をしめ
さない
しめすことを疎遠にしている
かいわにははさまれない
雑草は手つかずの場所にひろがっていく
たいていは同じクラスで繁茂している
たのむからまざらないで、と
くさのいきではなを摘まむ
人差し指にまといつく匂い
半ズボンでかけだすのはあたまが禿げかかった
ちゅうねんおじさんたちの走者の心構えで
次へ、続きへ
垣根をとびこえるさきの

いち、にい、さんのろうどう
どたんばにくさむらがある、むらむらしながら
雑草のなかでもツル草やツタ草は
よりかかれるものにまきついていく
まきまきの野原が行き手をさえぎって
くらしを背に負って
ぼくらにまきついてくるのは、気にしないでもいい
考えないでいい
だれかさんが、黙ったままペソをかいている
いつのまにか無花果がもぎとられていた
まといつきながら、まきつかれる
とぼとぼと帰っていく
ふるさとにまきつかれ

屋顔の色に惑わされている
よりかかるものには
ちからもほこりも
積もり積もっているが
悪意がない民草は純情編隊で突き進んでいく
いのちばんにかけつけ
手足にまきついた、あたまにまきついた
まぼろしのふるさとに殺られる
やられるまえに
ひとつ、ひとつに離れながら
ツタになり、ツルになり
まといつく
まきつく
草むらからたちのぼる
ひとつ、ふさつ、みつつ
くらしのにおい
はじける草の実
み、み、みがはじけ
み、み

注・与謝蕪村「草いきれ人死に居ると札の立つ」

◆夏の庭で

北原千代

わたしが庭の 肉桂の樹だったころ
ひとりの少年を宿した
蝉のぬげがらをてのひらに
わたしのあしもとを歩き来して
かれは遊んだ
たましいを転がすような
好い聲で歌った
わたしが庭の 肉桂の樹だったころ
少年はわたしを齧った
ひとしきり
根っこをしゃぶつてから
机の抽斗に隠した しろい仔犬を
わたしに抱かせた
わたしが庭の 肉桂の樹だったころ
夏はけだるく 永い痛みをおび
たましいの呼ぶ聲に
骨がふるえた
生まれなかつた少年は
陽の下でほおを照らされながら
温い樹液を吸い
夕暮れは今より ずっと晚かった

たえまない汗に湿った皮膚を
ちりぢり なだめている
少しずつ冷やされていく夏のせなかの
ゆるやかなカーヴ
ブリキのじょうろから 水をあげましょう
あなたは つる薔薇
むかしから そう呼ばれ
ほかの名で呼ばれなかつた
ぐうぜんのような顔をしてこの家に生まれ
漆喰壁を這っている
ひたいに銃創をもつ衛兵が
海をわたって帰還した日
だれよりはやく かれを出迎えた

◆地下水脈

北原千代

あなたはつる薔薇
おもいだしたように あかい花を咲かせ
毛虫の子や ハチの死骸を
朽ち葉にかくしている
ふるい水 あたらしい水を指でかきまぜましょう
（父の父その父らの父と母の母その母らの母の子
きょうここに 産毛をすずしくぬらす
八月十六日 午後六時半すぎ
刻々かたむく じょうろ
あなたにあげる
あわだつ あわだつ マリンスノウ
太古からの 温い水

ノースリーブのすきまから潜入する 八月の風は
方向をみうしなつて

◆金魚

今野和代

ピイ
ピカピカピ
金魚の眼が光る
金魚の詩を読んでもと
わたし 金魚になつてた
同居人に訴えるのだけど
鼻びらがひくひく動くだけ
プクンポアン声は泡ぶくになる
いつのまにかびっしり金色の鱗が
全身を覆いお腹がぼっこり膨らんで
たちまち鰓がはってきて呼吸しはじめ
尾先がねろりひらりもう私はランチュウ金魚になつて
胸鰭と尾心でバランスをとって水中を遊泳しはじめている
「一部では・・・クライナ南部クリミア・・・半島の
・・・バクラバで・・・ロシア陸・・・軍が・・・
侵攻を・・・開始・・・という情報も・・・出て・・・来ました・・・
一部では・・・クリミア南岸・・・ヤールタにも・・・
明滅するテレビのずっとむこうから
今にも戦争が始まりそうな緊迫した

◆キメラになつて

今野和代

羽音？波？
ルカの描く春
のリアの輪郭みたいな臉を開いて
呼ぶと 呼びかけると 懐かしい声を胸深く溶かしながら きみ
の頭上いつぱい広がる遠い青と うちの破れかぶれの爛れた空へ
伸びあがるように 爪先だって ざん ざん ばらん
キメラになつて ぶつかつて 巻きあげて 巻き上げられて
バランスをくずして からまつても
ノイズの渦の今日のくぼみに
鬱血を 繰りかえしながら 探す
めつた打ちされたボクサーみたいな ステップ
を 地上に ヒヨロ ヒヨタ 刻みつけながら すると
もう いいよ もう いいから もう もう いいよ 声は は

早口の言葉で途切れ途切れに男や女の
複数の声が聞こえてきた
クリミア ヤールタ！
私は一日だつて幸せだったことはないし、今も
これからも決して幸せになりっこない
自身を罪の女だと男の胸で泣いた
チエーホフの物語の旅するアンナが
泣きはらした眼を毅然とあげて
歩いていく海岸沿いの町だ
ホテルのテーブルには
首の欠けた騎馬武者の像がついた
埃で灰色になつたインク壺が静まりかえつて
物憂く点滅する燈台の灯が揺れる窓ガラス
そのむこうからしきりにする男の声
旅は始まつたばかりさ
こんな囲いなんかすぐに抜け出せるさ
もうすこしのシンボウ
俺たちは
まだその先の
はるかにフクザツな
コンナンなどびつぎりの
旅に出るのだよ
ピイピカピイ
金魚の目が光る
藻が揺れる
ピイピカ
ピイ

る の 泡ぶくになつて いいよ トン ツー ツー
ツ ツ ツ トトト ツーツーツー 暗い
気流を逆巻きながら 壊れたモールルス信号に
乗つて 残響の波を
ひきつれて(春が来たつて)
かがみこんだまま (春が来たつて) 胸の
りボンだけが しきりに 揺れて
もう 踝も 膝小僧も 眼も(何になろう)
肩も 腕も 輪郭が 朧に霞んで 影
を揺らしながら (なんになる) 滲んで 声は
る の 泡ぶくになつて ツ ツ ツ
ここに トン トート いる トト
こつち に ツー ツー ツー わたしは
ちぎれ雲の心になつて きみの声を
こつちに ひつつかもうとするのだけど
空が 割れて 傾いて 光の破裂のただ中に
吸われていった 息のむ夜明けの
煉獄の火色に溶けて

◆音の羽

萩原健次郎

京都市左京区修学院、自宅の周辺を歩く。赤山禅院から、離宮の前を通り鷺の森神社まで歩いていると、この一帯は比叡山の麓、音羽川の本、支流に開かれた町であることに気づく。点在する、名所には観光客が訪れるが、それ以外では人と出会うことは稀である。無音である。音の羽だけが、波のように動いている。落下の速度。

ゆつくりと落ちていく、
水は、ひとところに滞留し
また次の傾斜を下っていく。

逆上の、色を見せて
一筋、立っている、紅の糸を
身の喉にからませて
もう、すんでしまった欲を叩き
斜光は、無慈悲に無残に
降ってくる。

どこかへ、遊びにでようとしている。
水のめぐりに、あわそうか
それとも、乱れるままに。
わたしの、あたまのなが、乱雑に
血のままに、ただめぐっているだけで
飛び立ったここへ、もどってはこない。

ざわめきが、あなたの足音だとわかる。
身をとらえようとするの
それとも見つめるだけで、それでいいの？
純白の羽根に、青い血脈が見えるでしょ。
これは、わたしの川なの。

ここにくることは、許されている。
こんな汚い人間だけど
その白鳥の、か細い、青い川に
遊びにいたり、身投げしたり
そうして、のぞみも赤らむ。

白昼の散る道を思うと
この山懐に、どれだけの線が描けるか。

背後の逆上は、
一糸の朱で、赤々と溶けそうな鉄盤となり
迫ってくる。

わたしは、温室へ逃げ込む。
ああ、野菜の子どもたち、
大根の子どもたち
人参の子どもたち
煮たるか、

一瞬は、
(暴く情熱を隠して
おだやかにながめつつ、
この寒風の季節だというのに、まわりに
粒々になった、小蠅がとびかかっている。

この坂の安穩に、慣れて
洞の道は、薄ら灯りに濡れている。
あのう・・・
口ごもるわたしの思い出は、
ほんの数分前の、野菜の子どもたち。
あるいは、子どもか成虫かさだかではな

宮の奥へ、隠れるように進んでいくと
そこには、木の根の筋が隆起している。
人や、鳥や、木の、混濁したいのちの脈が
ただ網目のように絡み
あたりいちめんが
静脈のいろをしている。

翻る薄い川面に、ゆらめく文字が見える。
三、川、
二、リ、
一、し、
布袋のなかに、
川、離、詞が、
死角から、まがっている。

ぶらぶらと、その袋をゆらししていると
ぴーっと、鳴る。
ぴーっと、ぴーつの塊が
頭上を飛来して、
すぎ、去る。

皮離師という、手業の人などいたかなあ。
滝の下から、坂は急登になり

い蠅。
くやしいことに、蠅の音。
どうしたら、麓の家庭に戻れるか。
あるいは、この先の滝へたどれるか。

煮る匂いと
だれかとの、わたしが、愛想笑いしながら
なにかを話す声と、重厚な管弦楽と、
道の両側からは、実に雑にあいまいに
わたしの、質と数と、量と形と、
わたしの、庭と、
棒と、指と、先端を
捨てるためのノイズだけが充滿している。

とろとろしてきて休んでいると
背の、夕照が、
ものすごい速さで、濃くなってきた。

あきらめたら
棒のせいにできないではないか。
呼ぶ声に驚かなくてもいいのに。
逆流の鷺の細い脚が、地に向かって揃い

道の中筋には、大きな石塊が転がって埋
まっている。
人が埋めたもののように、
人と獣の足跡は消され
急ぐ、魂魄だけが
うっすらと地を均している。

すれちがうとき、
獣の華奢な脚の、
触る感触が、ふいてくる。
頬に、思い出などの

それも、青い脈で。
鹿鳴の方角か、むこうの橋の、
わたしには、なにも見えない。

音の羽根が、撥ねている、
女の悲鳴とそっくりな、冷たい空気は、
鹿たちの、錯乱する移動を
ただ、抱いている。



伝説のフラメンコの女王、カルメン・アマジャ(映画パンフレットより引用)

メキシコに渡った バイラオーラたち

サパテアードだけがフラメンコではない。

しかし機関銃のように早く、正確に、そして天地をも轟かすような大きな音で、床を靴底で打ち続けるサパテアードの素晴らしい音を前面に出したドキュメント映画「ジプシー・フラメンコ」(エヴァ・ヴィラ監督、2012)を見ると、フラメンコという芸能の多面性にただただ驚かされる。

この映画の興味深いところは、フラメンコの作品だけに終わるのではなく、スペイン現代史の影の部分がひたと見え隠れしていることである。

バルセロナ市にはかつてヒターノ(ジプシー)たちが集住する地域があった。この映画の原題である「Bajau」(バハリ)とは、ヒターノたちがバルセロナを呼ぶときの名前だそう。カタランにもフラメンコは花開いていたのだ。

カルメン・アマジャ(1913-1963)もそうしたバルセロナのヒターノ世界が生んだ伝説のバイラオーラだった(バルセロナ市内に彼女の偉業をたたえる泉と公園がある)。映画の冒頭ではそのカルメンの踊りと唄を写しだした実写映画が現代のバルセロナで上映されていて、この映画のもうひとり主人公であるヒターノの男の子(ファニート)がスクリーン上のカルメンの動きに釘付けになるシーンが出てくる。

ガウディの建築などでバルセロナは観光で名が知られているが、スペイン諸都

市のなかでも国際化が進んでいて、さまざまな民族がこの都市に棲んでいる多民族都市なのである。人が集まるということは、文化・音楽の移動もそれに伴う。バルセロナはスペイン有数のミクスチャー音楽の拠点となっている。この音楽シーンはいまや多くの刺激を世界に発信していることで注目されている。こうした影響を受けてバルセロナのヒターノたちはフラメンコの伝統の上に新しい音楽の要素を入れて独自の音楽を展開しているのである。

そんな彼らと競演するのが、メキシコからやってきたバイラオーラのカリメ・アマジャである。その母メルセデス・アマジャは、カルメン・アマジャの姪っ子にあたるというフラメンコ一族なのである。リハール会場に現れたカリメはいきなり全開でサパテアードを披露する。その力強さ、素晴らしいに圧倒されたバルセロナのヒターノたちは「想像以上だ」と驚嘆する。

ではどうしてバルセロナ出身のヒターノたちが海向うのメキシコに住んでいるのだろうか。それはスペインの今を語るときに必ずといっていいほどその背景で無言劇を演じているのがスペイン内戦(1936-1939)なのである。映画パンフレットの解説(伊藤千尋・朝日新聞元バルセロナ支局長)によると、スペインの「フジヤマゲイシャ」的イメージのある闘牛とフラメンコについて、闘牛(関係者)は「制度と型」を大切にするため(闘牛はきつちり午後五時に始まる)フランコ側(保守派・反乱軍)につき、フラメンコは「自由と解放」を表現する芸能であることから、共和派につくとといった構図となったそう(フランコが生きている時代のタブラオにおけるフラメンコ演奏者は背広にネクタイ着用が義務づけられていた)。バルセロナは内戦において共和派の最後の都市拠点のひとつとなり、すでに戦局の行く末が決まったときから共和派に市民たちは内戦後の肅正を怖れてメキシコに大量に亡命したのである。

カルメン・アマジャもこうしてメキシコに亡命したバイラオーラであった(始めは南米に向かったようだが)。カルメンはフランコが死んだ後の自由になったスペインを知らない。きつと彼女は故郷のバハリで踊りたかっただろう。

詩と評論

月刊「Mélange」VOL.94
めらんじゅ

2014年08月16日 通巻94号

発行所/月刊「Mélange」編集部

〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F

編集・発行人/大橋愛由等(『Melange』同人)

Mobile 090-5069-1840

maroad66454@gmail.com

定価 500円(税込)